

日本ではというごとく、古くから罪穢(つみけがれ)に対して、「物忌(ものいみ)」をして身を清め、「禊(みそぎ)」や「祓(はら)い」によって身を清めました。やがて形代(かたしろ)に穢(けがれ)を移すということも行なわれるようになり、やきものや紙でできた人形(ひとがた)や自分の顔を土器(とぎ)に書いたもの(人面墨書土器)を身体でなでたり、息を吹きかけたりして自分の罪穢(つみけがれ)を



恋瀬川に流された人面墨書土器 (平安時代)

ひなまつりの行事が行なわれる三月三日は、上巳(じょうし)の節供と呼ばれます。上巳(じょうし)というのは、旧暦三月の最初の巳(み)の日という意味で、古代中国の「祓(はら)い」の風俗行事が日本に伝わったものです。中国では、一年に何回か訪れる季節の変わり目に、身体を清めて神に飲食物を供え、神と共食することによって霊力を身につけ、身の安泰を願いました。

病(びょう)気などを移して河川に流し込まれた。これに雛遊(ひなあそび)が融合して誕生したのが貴族を中心とした「流し雛」というものです。江戸時代になると雛遊(ひなあそび)は庶民にも広まり、大人が子どももの成長を願う「ひなまつり」へと変質していきます。これ以降に、ひなまつりには鑑賞としての雛人形(ひな人形)が競って作られるようになりまし

罪(けがれ)や穢(はら)を祓(はら)って身を清める行事が江戸時代に子どももの成長を願う行事へ

ひなまつり

3月3日



ふるさとの年中行事

文芸ひろば

俳句

短歌

着ぶくれの猫背の映る玻璃戸かな
薄氷の甕に雀の来て遊ぶ
菊根分け夢を明日へ繋ぎけり
春の風都々一坊の小さき墓
鶯に五感の目覚め貫ひけり
髪なでて一言交わし雛飾る
蝌蚪生る青空うつす水たまり
足元に小草目覚める春となり
雪溶けの水に流るる若葉かな

枝 力 (稲吉)
松村久子 (稲吉東)
矢口三郎 (稲吉東)
桜井筑蛙 (中志筑)
石塚文子 (牛渡下郷)
折本アイ子 (鹿ノ山)
萩原とし子 (南根本)
松澤よ志の (深谷二)
宮本てるみ (横堀)

神さぶる立山連峰雲に浮くを車窓に見つつ室堂に到る
沢山の話題バックに詰めて急ぐ文通の友と落ち合ふ場所に
幼日の障子に映す影絵あそびはらから揃い父母若かりき
菊の香に長き勤めを想いけり短くもあり長くもありし
新聞の割引のチラシどっさり用なき吾には始末に困る
逝きし姉に想ひ頭たせて籠りをり冷えびえとしてみぞれとなりぬ
休日の早朝呼びリン押しは誰寝巻姿で嫁とまごつく
甘酸っぱい湯気かきけぶる大浴場無数のりんごがぶかぶか浮かぶ
中空に冴えてすがすがし十六夜の月に魅せられひと時を佇つ
ブッセの詩讀じていた日も在りて今でも遠し山のあなたは

遠藤富重 (下稲吉)
田中好子 (下稲吉)
中根美子 (下土田)
中島良平 (稲吉東)
佐藤千代 (穴倉)
小室貞江 (西成井)
名倉親子 (下大堤)
矢口きぬ (下土田)
石塚延夫 (上土田)
菅谷味子 (柏崎)

学校だより

平成20年度に50周年を迎えます

南中学校

夢・感動・信頼の
学校をめざして



茨城県ハートいっば い推進校として

本校では、県のハートいっばい推進事業・道徳教育の推進校として、生徒の実態に合った、心に響く道徳の自作資料の開発の研修を行なってきました。本音で生徒に語りかけるために、生徒にとつて身近で実際にありそうな、そして生徒が考えたくなるような資料作成に研修を積み重ねてきました。

この研修の成果として、生徒も本気で考え、悩む姿が見られ、生徒一人一人が自分自身を見つめる目が豊かになりました。また、自作資料の作成を通して、話し合ったり、実践や検証をしたりする中で、「本気で考えさせたい」「生徒の心を揺さぶりたい」など、教師の姿勢も変わってきました。自作資料は、四月以降に県のホームページで紹介されます。

往復80キロの 道のりを自転車

本校では、生徒たちにより多くの体験をさせたいという思いから、二年生が立志行事を実施しました。それは、二月四日・五日の一泊二日で白浜少年自然の家で宿泊学習を行なうというもので、南中から白浜まで四十キロメートルの道のりを自転車で行なうことになりました。そばづくりやバーベキューなど、保護者の方々のご協力の下、生徒たちはたくさんの体験をし、無事目的を達成することができました。きっと、この二日間は生徒たちにとって、忘れられない思い出になったと思います。



自転車で霞ヶ浦大橋を通行する2年生

校庭に悠久の鳥居

選択社会の授業で校庭に制作した竪穴住居。春には桜と茅葺きのコントラストで、時代を超えた日本の美をかもし出してくれるだろうと期待されています。



創立50周年記念事業

南中学校は、今年で創立五十周年を迎えます。そこで記念式典を、七月六日に実施することになりました。現在、実行委員会を編成し、各種委員会を組織して開催準備を進めています。また、同時に「五十年の歩み記念誌」の作成を行なっているところです。生徒たちには、この機会に学校の歴史や、伝統に対する関心や理解を深めさせ、愛校心を育てていきたいと考えています。